

お札と切手の 博物館 ニュース

Banknote and Postage Stamp
Museum News

Contents

展覧会報告 特集展「お札の模様 流線が描くArt 工芸官作品展」

収蔵品紹介 「大黒札」として親しまれた「日本銀行兌換銀券(旧券)」

2025/7/1
Vol. 56



展覧会 報告

令和6年度特集展 お札の模様 流線が描くArt 工芸官作品展 2025.1.15(水) — 3.9(日)

令和7年1月15日(水) から3月9日(日) まで、特集展「お札の模様 流線が描くArt 工芸官作品展」を開催しました【図1】。

当館では、令和4年度から工芸官の作品展を継続的に開催し、その技術力を紹介しています。初回の原版彫刻、2回目の「すかし」に続き、今回は「彩紋」をテーマに取り上げました。

彩紋は、独特の曲線で構成された複雑な幾何学模様で、150年の間、お札に採用され続けている重要な偽造防止技術です【図2】。一方で、繊細かつ重厚感ある装飾性や、無限のバリエーションで多様なモチーフに調和することから、お札になくてはならないデザインでもあります。

彩紋は、元々は専用の機械で、大きささまざまな歯車を組み合わせて編み出されていましたが、現在ではコンピュータで作製されています【図3】。作製にあたっては、数学的知識をはじめ、創造力、デザイン力等の高度な技と経験が求められます。

このような彩紋は、お札の主役たる肖像や額面(文字)等を引き立たせる「脇役」です。とはいえ、その一つ一つは、線と線との粗密、絡み、抑揚等のバランスにこだわり、考え抜かれた模様であって、工芸官の「作品」とも言えるでしょう。

工芸官は、自然に流れるような線の抑揚から生まれる美しさを大切にしているといいます。そのうえで、偽造防止のために複雑で個性あるデザインを日々考え、模様を作製続けています。その一助となるのが「彩紋画」です。工芸官が各々の個性を生かして作製した豊富なデザインの彩紋【図4】と、その曲線や精緻な表現を最大限に活用した「流線のArt」【図5】は、他にはない表現力で、独特の迫力が感じられます。



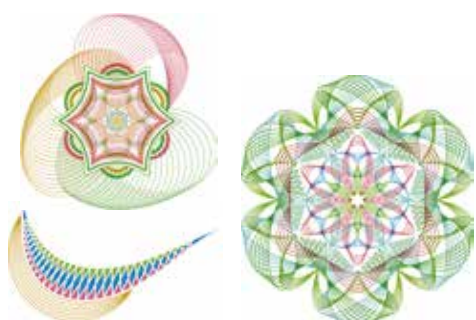
【図1】 展示風景



【図2】
現在の5000円に使われている
彩紋部分(拡大)



【図3】
コンピュータによる
彩紋作製



【図4】 工芸官がデザインした彩紋



【図5】 彩紋画「ツノメガニ」(部分拡大)



会場では、彩紋が採用された代表的なお札等も紹介しました。なかでもユニークなのが、昭和59(1984)年に発行された1000円です【図6】。



【図6】
日本銀行券 D1000円(表裏) 昭和59(1984)年



【図7】
(上) 日本銀行券 E1000円 平成16(2004)年
(下) 日本銀行券 F1000円 令和6(2024)年

歴代のお札のデザインの多くは、その枠模様として、彩紋とともに植物の葉や茎をデザインした「唐草模様」を組み合わせており【図7】、より重厚感が感じられますが、このお札は両面とも唐草模様がなく、ほぼすべてが彩紋で構成され、全体に軽やかな印象を受けます。同様に、平成15(2003)年に発行された国債【図8】も、すべての模様が彩紋で構成されており、従来の唐草模様を使ったもの【図9】とは一線を画す斬新なデザインとなっています。



【図8】 第21回特別給付金国庫債券 100万円 平成15(2003)年



【図9】 第19回特別給付金国庫債券 100万円 平成13(2001)年

一見当たり前のようにデザインに溶け込んでいるお札の模様は、ハイテクと美が共存する高度な技です。歴代の工芸官のたゆめ研鑽により受け継がれてきた彩紋は、長年にわたって偽造を防ぎ、多種多様なデザインを巧みに彩ってきました。そして、今なおお札の表裏に色とりどりの姿を見せています。これを機に、ぜひ虫眼鏡を片手に、改めてお札の模様にご注目いただきたいと思います。

(学芸員 土井 侑理子)



※ ホームページ上で本展示の一部をご覧いただける特設ページを公開しています。ぜひ併せてご覧ください。

表紙クイズ

表紙の「ツノメガニ」の周りには 12 の星座が描かれていますが、1つだけ星座ではないものがあります。それはどれでしょう？

「ツノメガニ」の周りには 12 の星座が描かれていますが、1つだけ星座ではないものがあります。それはどれでしょう？

「大黒札」として親しまれた 「日本銀行兌換銀券(旧券)」

◆はじめに◆

現在使用されている「お札」の正式名称は「日本銀行券」です。この日本銀行券が初めて発行されたのは明治18(1885)年のことで、今年令和7(2025)年は日本銀行券誕生140年という節目の年にあたります。

日本銀行券が登場するまでには、政府、国立銀行などが発行した様々なお札が流通していました。経済の安定を図る目的で日本銀行が設立されました。この日本銀行が発行した最初のお札である日本銀行券が、今回ご紹介する「日本銀行兌換銀券(旧券)」でした。

実は、当館にご来館いただいたお客様からしばしば寄せられる質問の一つが、

「日本銀行兌換銀券」とは、どのようなお札ですか？

というものです。現在使われている日本銀行券と大きく名前が異なること、兌換銀券の意味は何か、いつ頃姿を消してしまったのかなど、興味を抱く方が多くいらっしゃるようです。そこで本稿では、「日本銀行兌換銀券(旧券)」発行140年を記念し、皆様のご質問にお答えするべく、その歴史や特徴について詳しく解説いたします。

◆「日本銀行兌換銀券(旧券)」発行の背景◆

お札は、江戸時代には既に存在していたことが確認されています。各藩が発行していた「藩札」がそれで、藩内のみで使える地域通貨でした。現存する最も古い藩札は、寛文元(1661)年に越前福井藩が発行した越前福井藩札です【図1】。

「明治」と改元された明治時代初頭、政府や国立銀行(国の法律に基づき設立された民間銀行)が、太政官札、民部省札、国立銀行紙幣などを発行していました。明治10(1877)年に勃発した西南戦争の戦費を賄うため、大量の紙幣を発行した結果、深刻なインフレーションが巻き起こりました。この時に発行された紙幣が、金や銀と交換ができない不換紙幣であったため、紙幣の価値が不安定だったのです。このような事情により、大幅に下落した貨幣価値の安定を図る目的で、政府はベルギーの国立銀行にならい、紙幣の整理・発行・管理・金貨や銀貨の兌換を一か所で行うこととして日本銀行を設立し、通貨制度の統一を進めました。

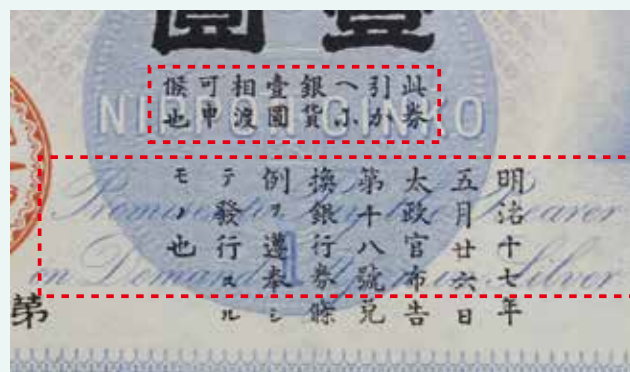
「日本銀行兌換銀券(旧券)」は、日本銀行が創設後初めて発行した紙幣を指し、昭和17(1942)年に兌換制度が廃止されるまで流通した紙幣でした。日本銀行は明治15(1882)年6月に定められた「日本銀行条例」により設立され、明治17(1884)年5月に制定された「兌換銀行条例」の中で、銀行券を作ることと定められました。



【図1】(参考)越前福井藩札 銀5両 寛文5(1665)年

お札を製造する設備を持たない日本銀行に代わり銀行券の製造を受託したのが印刷局で、現在に至っています。また、兌換銀券は銀と交換可能であったため、紙幣の価値の変動が少なく、高い信頼性がありました。そして、紙幣価値が安定していることから、兌換銀券の流通は経済の安定をも意味したのです。

【図2】は、「日本銀行兌換銀券旧壹圓券」の表面に記された文言の画像です。



【図2】

此券引かへに銀貨壹圓相渡可申候也

Promise to Pay the Bearer on Demand 1 Yen in Silver

と示され、「日本銀行兌換銀券旧壹圓券」と銀貨が引換可能であることが、日本語と英語で併記されています。この紙幣の発行については官報で告示の上、各府県に見本券2枚を送付して、発行の周知を図りました。

◆大黒天の図柄◆

「日本銀行兌換銀券」は、イタリア人の彫刻家エドアルド・キヨッソーネが、デザインと凹版彫刻による原作作製を担いました。

日本銀行兌換銀券は、10円（明治18年5月9日発行）【図3】、100円及び1円（明治18年9月8日発行）【図4】、5円（明治19年1月4日）の順で4券種発行されました（残念ながら、当館では100円紙幣を所蔵していないため、画像は掲載しておりません）。

図柄は、10円、100円、1円各紙幣は表面に、5円紙幣は裏面に大黒天像を配しています【図5】。全ての券種には、ねずみが描かれていますが、5円紙幣のみ、その位置に若干の差異が見られます。

彫刻の方法は、ネズミ、米俵、大黒天の顔などは極めて浅い凹版の点線で彫刻し、衣装や頭巾、小槌、靴などは太く大胆な深凹版による力強い線となっています。

大黒天は福々とした表情の神様として知られていますが、本来は憤怒の形相をした戦闘の神様でした。日本には平安時代に最澄が唐から比叡山に伝えたとされ、室町時代に入ると、恵比寿と大黒の二つの神様を合せて祀る風習が定着しました。七福神の一神様として信仰を集め始めるのはこの時代からです。近世に入るとかまど竈や台所に祀られ、特に商家では商売繁盛、農家では豊作の神様として崇拝されました。頭巾を被り、打ち出の小槌を手に持ち、米俵の上に座った姿が、穀物の神様を象徴するとされる所以です。



【図3】



【図4】



【図5】

大黒天とねずみは対として描かれます。これは、^{おお}大黒天(大黒天)が受けた試練を、^くねずみの助けにより乗り切ることができたと記す『古事記』「根の国の段」に由来しています。

この紙幣の図柄として大黒天像が採用された理由は明らかにされていませんが、発行当時の明治18年は不況であったため、経済回復の願いを込めて商売繁盛の神様である大黒様が採用されたとする説、または、この紙幣の前に国立銀行から発行された紙幣の裏面に恵比寿天が配されていたため【図6】、関連の深い大黒天が選ばれたとする説などがあります。



【図6】 国立銀行紙幣(新券) 1円裏 明治10(1877)年

◆駆使された偽造防止最新技術◆

明治4(1871)年に創設された大蔵省紙幣司を前身とする国立印刷局は、一貫してお札の製造に従事してきました。その歴史は偽造防止技術を向上させる歩みであるとも言えます。140年前に発行された「日本銀行兌換銀券(旧券)」にも、現在の紙幣に見られる偽造防止技術が既に導入されていることは、特に注目に値すると言えるでしょう。ここでは、「日本銀行兌換銀券(旧券)」に採用された偽造防止技術についてご紹介します。

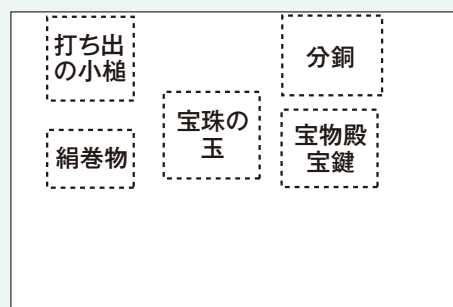
この紙幣が目立つ大きな特徴として、主な図柄が淡い青色のインキで印刷されているところにあります。このインキは、当時漸く普及し始めた写真製版による複製防止が目的でした。その頃の写真技術では、白地に淡い青色の印刷物を撮影するのが非常に困難であったため、偽造防止の一環として、印刷にはこのインキが用いられたのです。ところが、インキ成分の中に鉛白が含まれており、化学変化によって黒く変色するため、かえって写真撮影による複製を容易にする結果となっていました。また、日本銀行兌換銀券(旧券)に用いられた紙は三桎抄紙^{みつまた}でしたが、紙の強化目的で蒟蒻芋^{こんにやくいも}の粉を混ぜていたことが原因で、害虫やネズミの被害に遭うという想定外の事態が起きました。この事実は、紙幣の製造の難しさを伝えるエピソードとして語り継がれています。

次に、現行の紙幣でも使われている「すかし」の技術について見て行きましょう。

「すかし」とは、紙をすく段階で紙の厚さを部分的に調整し、図柄を表現する高度な製紙技術です。紙の周囲より薄い部分は白く見え、反対に厚い部分は黒く見えます。これらをそれぞれ「白すかし」「黒すかし」と呼び、日本の紙幣はこの2種類のすかしを組み合わせ「白黒すかし」として製造されています。



【図7-1】



【図7-2】

「日本銀行兌換紙幣(旧券)」は、日本で初めて「黒すかし」の技術を採用した紙幣でもありました。その一例を挙げますと、10円紙幣の上段に打ち出の小槌、分銅、下段に絹巻物、宝珠の玉、宝物殿宝鍵が見られ、これらのモチーフはすべて黒すかしの技術が用いられています【図7-1、7-2】。

さらに、1円と10円紙幣の表面には、ルーペ必携の微小なマイクロ文字が施されています。

再び1円紙幣【図4】と10円紙幣【図3】をご覧ください。双方の紙幣、表面中央上部には太陽のようなデザインが配されています。太陽光線の体裁で伸びた放射線状の線は、拡大鏡で見るとマイクロ文字であることが分かります。

マイクロ文字とは、肉眼では見えにくい極小文字のことで、複写・複製を作ることが難しいため、現行紙幣にも施されている偽造防止技術の一つです。1円紙幣では「NIPPON GINKO ONE YEN」と「兌換銀券壹圓」のマイクロ文字【図8】、10円紙幣では、マイクロ文字による「日本銀行兌換銀券」の連続文字と五本の細線【図9】が放射線を形成しています。

これらの偽造防止技術は、印刷局が誇る高度な技術の証左として現在に引き継がれています。



【図8】



【図9】

◆結び◆

「日本銀行兌換銀券」は、明治18年に日本銀行が発行した最初のお札であり、「黒すかし」の技術を初めて導入するなど、偽造防止のために当時の印刷・製紙技術の英知を集結して製造された紙幣であることをご紹介しました。当館2階展示室「印刷局の創設」コーナーにて1円、5円、10円紙幣を展示しています。この機会にぜひご鑑賞下さい。

(学芸員 林 直子)

参考文献

- | | | |
|-------------------------|-------|-------------------------------------|
| 『図録 日本の貨幣8』近代兌換制度の確立と動揺 | ----- | 日本銀行調査局編 東洋経済新報社
昭和50(1975)年4月1日 |
| 東京美術選書『紙幣 肖像の歴史』 | ----- | 植村 峻著 東京美術出版
平成元(1989)年11月30日 |
| 『お札の文化史』 | ----- | 植村 峻著 NTT出版
平成6(1994)年6月27日 |
| 『紙幣肖像の近現代史』 | ----- | 植村 峻著 吉川弘文館
平成27(2015)年6月20日 |



令和7年度第1回特別展

切手のひみつ研究所

～技・美・知を探る～

2025年7月23日(水) ▶ 8月31日(日)

切手は、「前もって郵便料金を支払った」ことを証明するために手紙に貼る重要な印刷物です。サイズは小さくても、印刷・加工技術を駆使してデザインを精巧に表現した「小さな芸術品」であり、長年その国の歴史とともに歩み、世の中の動きや文化を体現してきた「生き証人」でもあります。

今年は切手が誕生してから185年。この夏は、切手のひみつ研究所で技・美・知の宝庫である日本切手のひみつを調べてみませんか？

また、会期中の7月26日(土) から8月31日(日) まで、手すきはがきづくり体験イベントも実施します。ぜひご参加ください。

体験イベント【手すきはがきづくり】



好きな図柄のすかしが入ったはがきを手作りしよう！

「すきげた」という道具を使って、紙の原料をすくってみよう！

紙はどのように作るのか、「すかし」はどんな仕組みなのか、実際に作って確かめてみましょう。出来上がったはがきに切手を貼れば、投函できます。

夏休みの自由研究にもご活用ください。

所要時間 約10分

開催日時 7月26日(土)～8月31日(日) 10:00～11:50、13:10～16:20

※混雑状況により早めに受付を締め切らせていただく場合があります。

ご利用案内

入館
無料

開館時間：9:30-17:00
休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)
年末年始、臨時休館日

独立行政法人 国立印刷局
お札と切手の博物館

〒114-0002 東京都北区王子1-6-1

TEL.03-5390-5194

https://www.npb.go.jp/museum



お札と切手の博物館

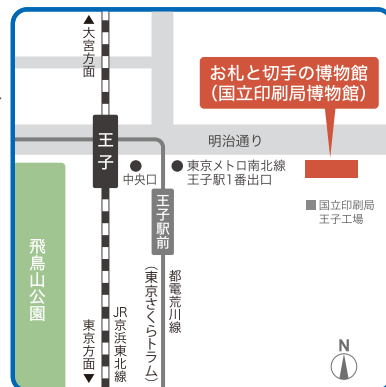
検索

交通

JR京浜東北線「王子駅」(中央口)下車 徒歩3分
東京メトロ南北線「王子駅」(1番出口)下車 徒歩3分
都電荒川線(東京さくらトラム)「王子駅前」下車 徒歩3分
※駐車場はありません。

常設展

新しい日本銀行券の紹介
偽造防止技術の歴史—印刷・製紙技術
重要文化財 スタンホープ印刷機
お札の移り変わり/世界のお札
切手の移り変わり/世界の切手
国立印刷局の歴史
※特別展開催時は一部展示の変更があります。



発行：お札と切手の博物館(国立印刷局博物館)

発行日：令和7年7月1日 ©2025

本書掲載の内容を許可なく複写、複製、転載することを禁じます。

※この冊子は再生紙を使用しています。